

第一回「泥流地帯」全国高校生朗読甲子園

決勝朗読原稿

泥流地帯「矢車」第一節

旭川に行く日、耕作は布団の中から起き上らなかった。

「耕作、汽車に遅れるぞー！」

拓一が起しに来たが、耕作はうつすらと目をあけて、

「腹が痛い」

と、低く言っただけだった。

「腹が痛い？ お前学校に行かない気か？」

「だって、腹が痛いもの」

「だってお前、入学式で宣誓^{せんせい}しなきゃなんないだろう、代表で」

拓一がやきもきする。祖父も祖母も驚ろいて見に来た。祖父の市三郎は、耕作の舌を見たり、脈を見たり、腹を触診^{しゅしん}したりしたが、

「少し脈が早いだけで、大病じゃなかンベ。ニラのつゆでも飲んで行け」

だが、耕作は腹が痛いと言って、頑^{がん}として起きなかった。富と武井の話を聞いてしまった耕作は、はじめて富の悲しさがよくわかったのだ。自分のために武井を諦めようとする富の気持が、耕作の心を強く打った。武井が自分を悪く言っただけのこと、当り前のような気がした。

「師範^{しはん}さ行けば、金はかからない」

と言った武井の言葉も、耕作は考えて見た。あこがれの中学を断念することは、辛かった。

あの夜、床の中で、耕作は泣くまいと耐えるのに必死だった。泣いては、一つ炬燵^{こたつ}に足を突っこんでいる祖父も祖母も、不審に思うにちがいない。

武井と富がこんな話をしていたから、中学に行かないなど言っでは、富に辛い思いをさせる。小学六年を卒業したばかりとは言え、耕作はそう考えたのだ。

翌日も翌々日も、耕作は体具合^{からだぐあい}が悪いと言って床^{とこ}から出なかった。十日目に、遂^{つい}に耕作は祖父に言っただ。

「おれ、もう中学に行かない。こんなに勉強遅れたら、追^おいつけない。一番で入って、何にもできないなんて言われたら、癪^{しゃ}だもん」

驚ろいた祖父は、じつと耕作の顔を見た。何もかも察したような表情が、祖父の顔に浮かんだ時、今までこらえていた涙が、耕作の目から一度に噴き出した。

「耕作！」

市三郎は耕作の肩を抱いて、その太い指で目頭^{めがしら}をおさえた。

「ねえちゃんば、嫁にやって」

そう言った時、市三郎は両手で耕作をしっかりと抱きしめた。